

茨城県自然博物館における恐竜展示のリニューアル ～中生代の森林ジオラマの更新とその効果～

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 学芸員 加藤 太一

1. はじめに

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、「過去に学び、現在を識り、未来を測る」を基本理念に掲げて1994年にオープンした自然系博物館である。毎年約40万人以上の来館者が訪れ、2017年5月には県立自然史系博物館としては全国初の累計来館者1000万人を迎えることが出来た。しかし、開館して20年以上が経過し、常設展示の一部では老朽化・陳腐化の進行が問題となってきた。そこで、各展示室においては小規模な展示替えを実施することで対応しており、2017年2月～3月には特に人気の高い恐竜の展示において大規模なリニューアルを実施した。ここでは、その大規模リニューアルが当館の入館者状況に与えた影響について分析を行ったので報告する。

2. リニューアルの概要

①リニューアルした展示

大規模リニューアルした展示は、第2展示室「地球の生いたち」に位置する「恐竜たちの生活」である。これはティラノサウルスなどの恐竜の生体復元ロボット（以下、恐竜動刻）を配置して中生代の森林環境を再現したジオラマ展示である(図1)。リニューアル前は、ティラノサウルス1体、ドロマエオサウルス3体、ランベオサウルス3体が配置されていた。これまで第三者機関による調査や当館が行った来館者アンケートの結果などにより、「恐竜たちの生活」は当館の展示の中で突出して人気が高いことがわかっていた。

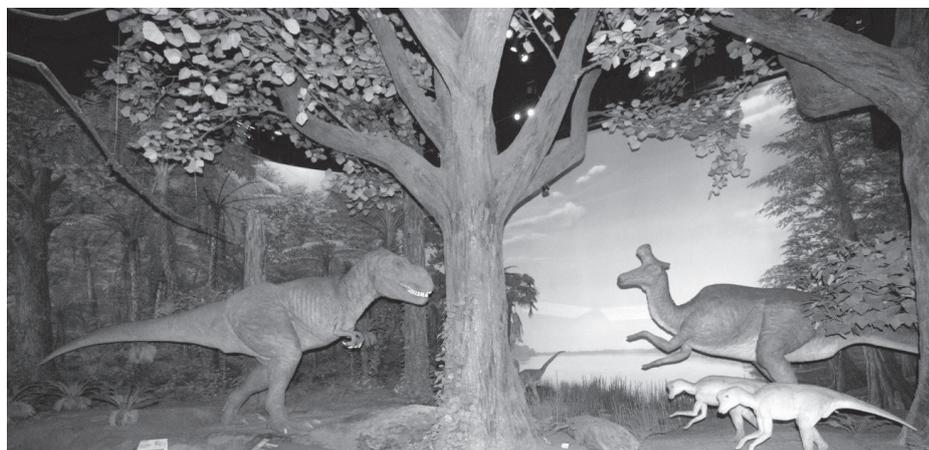


図1. リニューアル前の「恐竜たちの生活」

②老朽化・陳腐化の問題

「恐竜たちの生活」は当初 10 年後のリニューアルを想定されて製作されたため、経年劣化による機械の老朽化が進み、展示の維持が年々困難になっていた。特にリニューアル直前の数年間は駆動系の空気漏れ故障の多発、また、金属疲労でティラノサウルス動刻の頭部が落下するという致命的な故障も発生した。

また、20 年以上前のデザインであることから、現在の学説との齟齬が多く発生してしまっていた。例えば、ドロマエオサウルス類は現在では羽毛を身にまとっていたと考えられているが、従来の動刻に羽毛は生えていなかった。このように古い学説に基づいたままの展示は、博物館全体に対する学術的信頼性を低下させる要因となる。

③リニューアル内容

○ティラノサウルスの大人と子ども

骨格の展示（成体の全身骨格、幼体の頭骨）と対応させ、ティラノサウルスの大人と子どもの動刻を新しく配置した（図 2：右）。

○ティラノサウルスの体表の羽毛

幼体には全身に、成体には部分的に羽毛を生やす復元を採用した。

○トリケラトプスの新しい復元姿勢

トリケラトプスの動刻を新しく配置し（図 2：左）、近年の研究で明らかになった新しい姿勢（前肢のつき方）を採用した。

○被子植物の繁栄

プラタナスの巨木を撤去した。（当時まだ大型ではなかったと考えられている。）
花を咲かせる植物（原始的なモクレン類）の模型を新しく追加した。

○哺乳類の多様性

地上や樹上、水辺にそれぞれ適応した哺乳類の模型（3 種）を新しく追加した。



図 2. リニューアル後の「恐竜たちの生活」

3. 入館者数の推移

「恐竜たちの生活」リニューアル以降は有料入館者数が継続的に増加しており、過去10年間における1位を10か月連続（3月～12月）で更新し続けている（図3）。

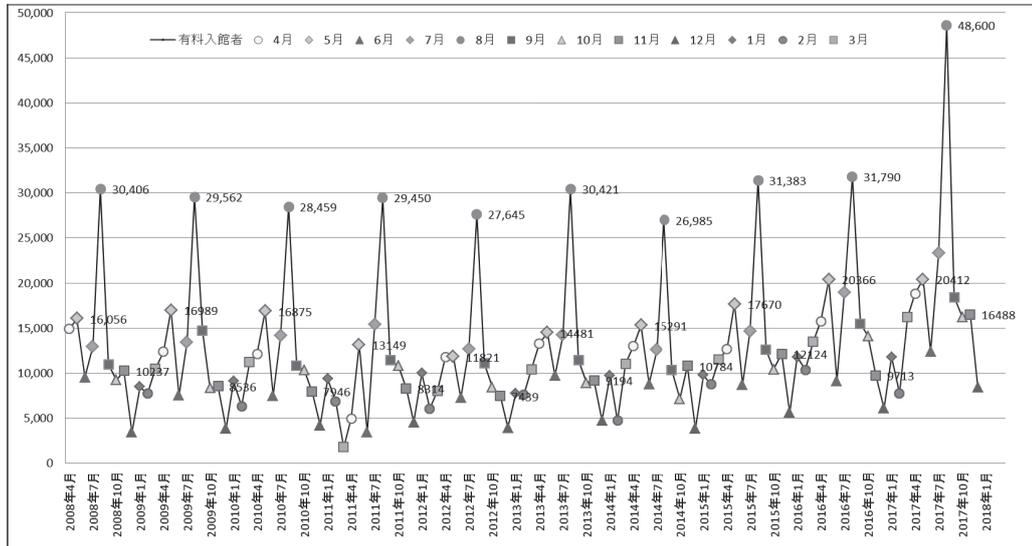


図3. 月ごとの有料入館者数の推移

年間3回開催している企画展も有料入館者数の増減に影響していると考えられる。しかし、企画展の開催日数が最も少ない6月において増加率が他の月よりも低下していないことから、リニューアルの影響が相対的に大きいものと判断できる（表1）。

表1. 2016年と2017年の有料入館者数比較および企画展開催日数

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
2016	13,509	15,767	20,366	9,140	18,939	31,790	15,474	14,117	9,713	6,075	
2017	16,218	18,819	20,412	12,404	23,298	48,600	18,405	16,231	16,488	8,425	
前年比	120%	119%	100%	136%	123%	153%	119%	115%	170%	139%	
企画展	開催	27	26	26	10	20	28	16	21	27	23
	非開催	0	0	0	10	5	0	8	5	0	0

5月において有料入館者数がほぼ増加していないのは、当館のウェブサイトでゴールデンウィークの混雑に関する特別な注意喚起（図4）を掲載したことや、日曜日の数が昨年と比べて少なかったことなどが要因であると考えられる。

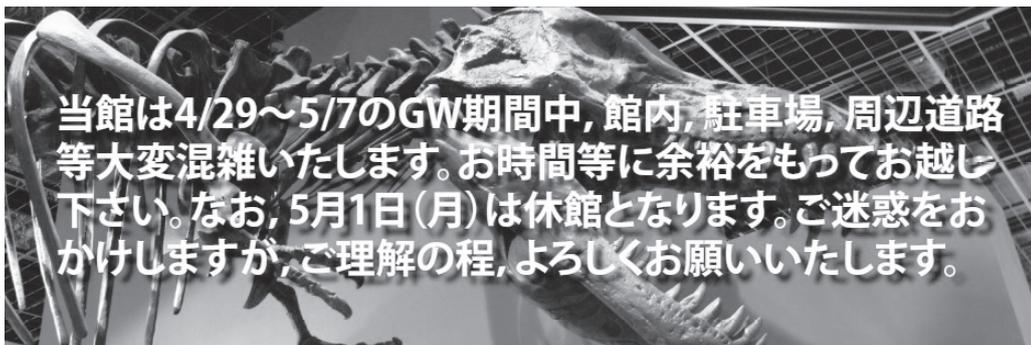


図4. 2017年のゴールデンウィーク直前に当館ウェブサイトに掲載した告知

4. 広報効果の分析および考察

① アンケート結果から示されるクチコミ効果の増大

まず、「来館者アンケート」の集計結果から「初めて入館された方の情報源」をみると、2017年度(平成29年度)は「人から聞いた」の回答率が大きく増加していることがわかる(図5)。これは何らかの大きな話題性により、クチコミ効果による新規来館者を従来よりも多く獲得できたものと解釈される。

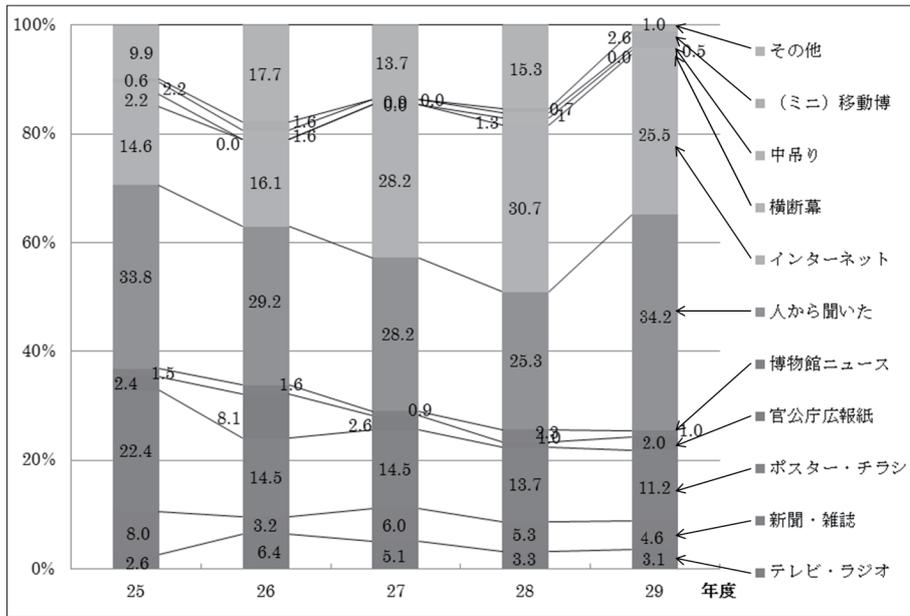


図5. 初めて入館された方の情報源の推移 (来館者アンケート集計結果より)

② Instagram を用いた話題性の検証

次に、来館者が当館のどのようなことを話題としているのか検証するため、Instagram (インスタグラム) での当館に関する投稿における話題について分析した。Instagram は投稿に必ず写真を伴うため、Twitter などよりも何が話題となっているのか判断しやすい。ハッシュタグ「# 茨城県自然博物館」を含む投稿を抽出したところ、リニューアル前に 557 件、リニューアル後に 1748 件の投稿があり、それぞれの話題となっている展示の割合は表2のとおりであった。

表2. Instagram での当館に関する投稿における話題の割合

	第1	第2		第3	第4	第5	DP	企画	館内	野外	他
		動刻	動刻以外								
更新前	3%	8%	9%	7%	5%	1%	1%	8%	7%	31%	19%
更新後	1%	17%	9%	6%	5%	2%	1%	18%	7%	19%	16%

集計の結果、更新前に最も話題となっていたのは「野外施設」で31%、2番目が「その他(複数の展示室の組み写真, 当館への道中の写真など)」で19%、3番目が「第2展示室」で17%(うち8%が「恐竜たちの生活」)であった。更新後では、最も話題となっていたのは「第2展示室」で26%(うち17%が「恐竜たちの生活」)、2番目が「野外施設」で19%、3番

目が「企画展示室」で18%となった。このことから、リニューアル以降は「恐竜たちの生活」と「野外施設」、「企画展示室」の3つが特に大きな話題性を持っており、入館者を増加させたクチコミ効果に大きな影響を及ぼしていることが示唆される。

次に、Instagramにおける「#茨城県自然博物館」を含む投稿数の推移について分析する。Instagramでの当館に関する投稿数は2017年3月以降で爆発的に増加している（図6）。2017年3月に投稿が大きく増加しているのは「恐竜たちの生活」のみであるため、これがInstagramなどにおいて大きな話題となり、新規来館者の獲得のきっかけになったと考えられる。そして2017年4月以降になると「野外施設」や「企画展示室」などに関する投稿数も伸びていくことから、新規に獲得した来館者層が当館のさまざまな展示に関して興味を持ち、SNS上で発信してくれるようになったと考えられる。

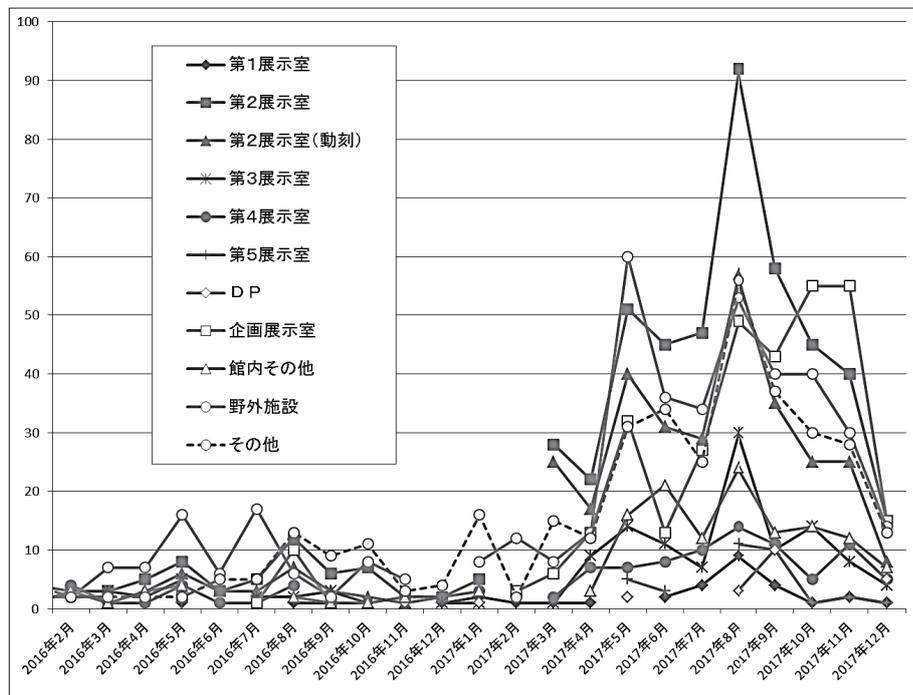


図6. Instagramにおける「#茨城県自然博物館」を含む投稿数の推移

5. 博物館における“SNS映え”と恐竜展示についての考察

○今後の博物館における“SNS映え”の重要性

今回の分析では、もともと人気のある展示を大規模リニューアルすることによってInstagramなどのSNSにおける当館の話題性が高まり、その効果が「野外施設」や「企画展示室」などのさまざまな展示に波及していったことが示された。こうしてクチコミ効果による新規来館者が増え、今年度の記録的な来館者数の増加を達成したものと考えられる。これはいわゆる“SNS映え（インスタ映え）”などと言われる、「SNS上における見栄えの良さ」が博物館の展示においても重要な時代になったということであろう。

“SNS 映え”する、つまり「SNS 上で見栄えの良い展示」には SNS を利用する多くの人が興味を持つため、教育効果も高くなると考えられる。また、来館者が多く訪れてくれるようになれば、博物館の展示全体の見学利用状況も向上することが期待される。そのため、当館では今後も継続的な小規模・大規模な展示更新をそれぞれ計画しているが、来館者が知人に「面白かった」、「良い展示だ!」と紹介したくなるような“見栄えの良い写真を撮りやすい”展示を構築するように意識する必要があると考えている。

○「恐竜非産出県」における恐竜展示と地域振興

茨城県では 2017 年 1 月現在、恐竜の化石は発見されていない。(恐竜が産出する可能性のある地層はあるが、) 恐竜が産出していない茨城の県立博物館として、恐竜の展示に力を入れる必要はどこにあるのだろうか。

まず、当館は「過去に学び、現在を識り、未来を測る」を基本理念とした総合的な自然系博物館であり、恐竜は「過去」について興味を持って学んでもらうために大変有効な展示要素である。また、地球の歴史や生命の進化について話をする上で、中生代および恐竜に関する解説はそもそも必要不可欠である。さらに、さまざまな博物館活動を有効に行うためには多くの入館者を呼び込む必要があり、そのためにも恐竜の展示が有効である。よって当館が今後もその使命を全うするために、恐竜展示の話題性を高く保つ必要性があると考えている。

6. 謝辞

このたび「恐竜たちの生活」をリニューアルするために必要となった海外博物館等の調査(『“恐竜”を通して自然科学を学ぶ展示』作成のための標本および現地博物館、フィールドの調査)において、公益財団法人カメイ社会教育振興財団および全国科学博物館協議会による「博物館学芸員等の内外研修に対する助成」を賜った。また、展示の製作にあたっては、国立科学博物館の真鍋真先生、矢部淳先生、木村由莉先生と、名古屋大学博物館の藤原慎一先生から多くの御助言を賜った。お世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。